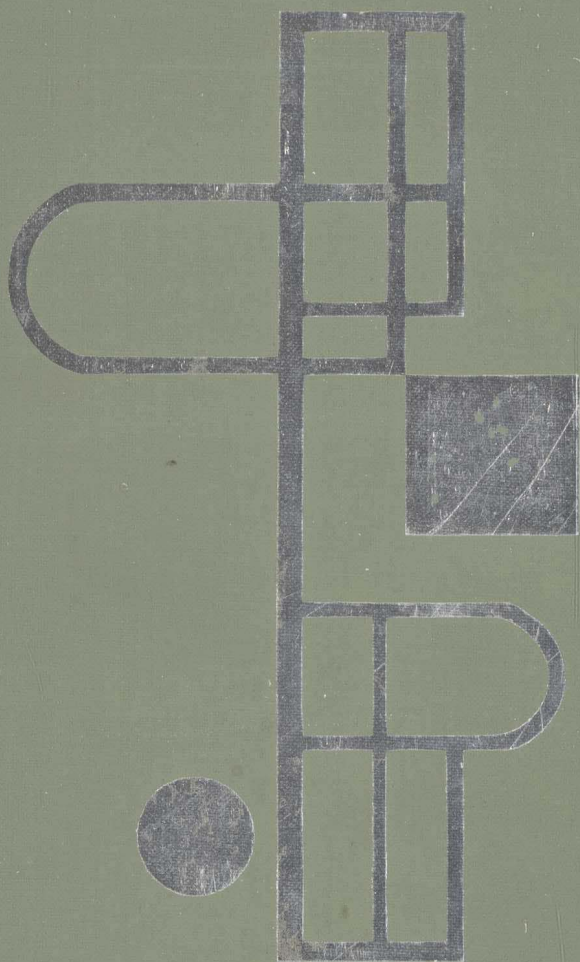
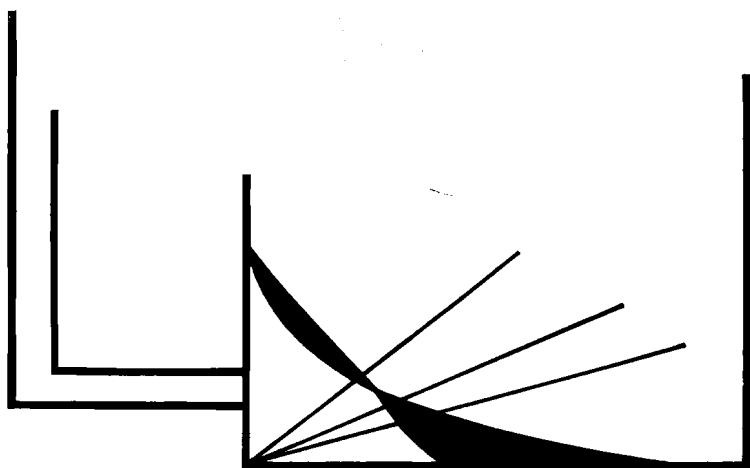




堀田善衛 集

新選 現代日本文學全集

30



筑摩書房版

堀田善衛集

昭和三十三年十二月二十日 発行

著者 堀田善衛
ほつ た よし え

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

(電話)東京二九局(七六五一(代表))
振替 東京一六五七六八

整版株式会社 精興社
印刷株式会社 精興社
製本 矢島製本所

堀田善衛集 目次

齒 車	五
広場の孤独	六
時 間	八
記念碑	九
鬼無鬼島	一五
断 層	二三
碎かれた顔	三九
水際の人	三九
曇り日	三七
国 境	四五

G・D・からの呼出状……………三九五

王国の鍵……………四〇五

堀田善衛……………平野 謙 四二三

解説……………埴谷雄高 四一六

装幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

堀田善衛集

齒車

人はいう、なにゆえに作者はその人物をハンガリーに行かしたのか、と。事直に作者はこれを告白する。かりにわずかなりともかくすべき音楽的理由を見いだしたとすれば、作者は、他のいずこへなりとも登場人物を導いたであらう。

エクトール・ベルリオーズ
「フアウストと魔狐」の序言より

一

終戦のあくる年、伊能は上海で中国がわのあの機関に徴用された。それは表むきは××文化運動委員会ということになっていたが、つとめて少し時間がたつてみると、文化機関どころか内実は学生や文化人の思想や動向を調査する査察機関で、おどろいたことには人を尋問し拉致拘禁する権能までもついているらしかった。そういう秘密警察的文化機関であつた。そんなこととは知らずに、伊能がむしろ進んで徴用をうけたのは、ひとつには日本にたいし、徹底的な信念をもつて抗戦に挺身した、いわば激しい精神の持ち主に会つてみたい、政治というものが全体どのくらい人間の純粹な情熱になりうるものか、そしてそういう人たちがどの程度まで自覚

的であるか、とそういったことを知りたいという氣持がつよく動いたからであつた。しかし機関の内実がうすうすわかつてくるにつれて、伊能はしだいにそんな氣持をいだいてもしよせんはむだごとに近いということを知られた。政治的世界においては、純粹な觀念の持主が決定的な役割を演ずることはほとんどありえないのだ。一週に二三度、短時間事務所に姿をあらわす主任委員の何大金は、異常な、ほとんど白堊質といつていいほどに青白い、阿片吸引者か変態性欲じやないかとおもわせるやせた男であつたが、地下工作の大物であつたという噂であつた。この主任委員と、いつも彼につきそう秘書兼護身役らしい張愛玲という女性や、伊能の直接の上司の陳秋瑾という女性など、機関に入下する人びとは、多かれ少なかれ血みどろな地下工作に終始した人びとであるといわれていたが、しかし、いづれもみなどことなく底ふかく汚れた感じで、勝利にもみなどことなく露もなく、この種の工作者独特のぶきみな疲労ばかりが目立つていた。もちろん、対日抗戦の勝利などすでに問題ではなく、抗戦最中から彼らの全力が対共産党の内戦に注がれていったことは明らかであつた。伊能は、そういう政治のもつとも残酷な機関に徴用されたからには、政治が人間そのものよりも明らかに巨大なものとして映る現代での生き方をそこで見いだそうとでも言えはいえる氣持を抱きはじめていたが、周囲のようすから漠然と察せられるものは、生き方とはむ

しろ反対のもの、殺され方ばかりであることを知り、故国へ帰らうという望郷の念も、しだいに濁りだしていった。そんな環境で日を過しているうちに、海一つへだてた敗戦後の祖国は、相對立する大国の情報査察機関とその手先の網の目におおわれているかに見えてきて、帰国についてもいわずになれなくなつていったのだ。人ひとり舟一隻も自由に出入らねこまかい残酷な網が四つの島をがんにじがらめにしていくかと思うと、もはや彼などの居場所が日本のどこにもないような強迫觀念にかられ、かつは敗戦によつて根をたれたような氣持がつよまつてゆく一方だつたので、彼は上海からもつと外へ、外へ外へと、二段も三段も論理を飛びこして自殺の場所をさがしでもするように地球の裏がわへゆく閩航路発見に努力を集中しだした。

委員会で伊能の仕事は、内外の新聞雜誌にあらわれた対日世論の調査であつた。仕事が一週間分まるとすると、金曜の午後ぶらりと出勤してくる咽喉のあたりに黒い小さな痣のある陳秋瑾といふ三十三歳の女子機関員に提出し、それについての感想を伊能には中国語よりもつこのいい英語で報告するのであつたが、陳女士は仕事にはまるで無関心で、伊能の報告もろくに聞かず、記録はばらばらとめくつてみるだけですぐにファイルに押しこみ、後は壁ぎわのソファに腰をおろして委員会内の動きを冷然と、しかし人の出入りだけは鋭い視線をきらりきらりと動かし、何かをさぐるように観察して夕方

になると卒然と帰つてしまふのであつた。世論調査などは文化運動委員会の看板にすぎないのだ。金曜ごとにそんなことをくりかえしているうちに伊能のほうでも嫌気がさしてき、かつは中国のあまりにも一方的な対日世論が不愉快でもあり、仕事をするのもバカらしくなつてきて、「No report」何も報告することはありません、といつて仕事はまったく放りだしてしまつた。それで陳女士は文句もいわず、また仕事と無関係な本を読んでも、そのころ内戦がしだいにはげしくなつて上級機関員が事務所内に長時間いることもまれだつたので、いつこう目立たなかつた。

上海はカサブランカ、リスボン、アルジェなどとともに、いわゆる International Trash 国際的な人間のクズどもが、クズ相応の闇の大仕事を仕でかすに恰好な港であつた。伊能はこの港の大倉庫群のあいだにある「血の雨横町」と呼ばれた一画にある、淫売屋をかねた酒場を一軒一軒夜ごとあさりあるいた。ありとあらゆる海洋国のことばで書かれた看板をさげた、それらの酒場は、船乗りの女あさり場であり、また密輸入人身売買・偽旅券などの市場でもあつたのだ。

ある夜、伊能はそうした酒場の一軒で、陳秋瑾とばつたり出あつた。はじめ彼は自分の目をうたがつたが、白人船員の気に入りそうな、はでな竜などの模様のはいつた旗袍を着ているとはいへ、入口に近いソファに細い足を投げだし

て掛けていた女のつめたい流し目と咽喉のアザは、どう見てもやはり陳秋瑾のものであつた。

彼女は一瞬きらりと探照燈で照らしつけるような眼ざしを投げたが、無表情のまま、伊能のテーブルへ猫のように足音もなくやつてきて、何と何との混血なのか、えたいの知れぬ女たちを追いはらつた。目の前にだまつて坐ると、彼女の背後にある委員会のナゾのような組織の網が急激にきりきりとしぼりあげられるような気がして伊能は鳥はだ立つたが、ちょうどその日の午後、目抜きの大通りで中共のスパイだという学生が後頭部にピストルを打ちこまれる残忍な光景を目撃したばかりだつたことが逆作用して、真剣になつておのれの企図を洗いざらい低声で話した。ところが彼女は伊能の話に一見無関心なように黙々と聞き入り、新来の客があると入口の方をじろりとながめるばかりであつた。伊能はあまりにも反応がないので拍子抜けしてようやく落ちつきを取りもどし、彼女の本務があの対日世論調査などではなくて、この酒場にこそあるのだ、そうならば危険な意図をいさぐ以上は、この危険な女を味方にする必要があると気づくまでに我にかえつた。彼が話しおえると、陳秋瑾は張りのない胸部に疾患のありそうな顔の皮膚をゆるめて、

「You, dangerous……」

あぶない人ね、と針をふくんだような、重慶なままりと思われるアクセントのつよい英語を咽喉の奥でつぶやいた。彼女はもううげに伊能の

コップにビールをそそぐと、

「きようはもうお帰りなさい。これからこの横町へ来るなら、この酒場以外へ行つてはいけませんよ、あぶないから。」

そう言つて手をさし出した。彼女の手は顔つきから想像した以上にあたたく、彼を見送る視線は、会話中の無関心さとはうつつかわつた、微妙な、何らかの理解とあわれみとをふくんだ微笑に近いものがあつた。

彼女は伊能の企図については「あぶない人ね。」と言つただけで何の感想ももらさなかつたが、伊能はそれ以後倉庫のあいだの横町へ行くことはやめてしまつた。そこにもまた文化運動委員会は完璧の網をはつていて完全に遮断されてしまつていゝと思えなかつたのだ。彼は事務所へ行くこともおこたりがちになり、病氣だといつわつて何日も何日も天井をながめて暮した。

——とんだ文化運動だ！

とそう仰むけに寝てつぶやいてみると、戦争や革命がそれ自体平和であり世界であるような現代においては、このとんでもない文化運動こそ最も知的な、しかも最も行動的なものではないか、Intelligence service というゆえんかと、そういったゆがんだ感想すら浮かんで来て、絶望するために必要な情熱さえわかぬという暗いくぼみへおちこんでいつた。

「とんだ文化機関だ！」

吐きだすようにもう一度声を出してつぶやい

たとき、階段を上がつてくる靴音が聞えた。かいたい皮靴の音であつた。彼の間借した家の中国人老夫婦は皮靴をきらつていつも手製の布靴をはいていたのだ。やがて伊能の部屋の前で靴音はとまり、

「イーノ！」

という女の声がかした。明らかに陳秋瑾の声であつた。戸をあけるとあいさつもしないでつかつかと入つてきて手にもつた小さなトランクを床に置き、

「臭い、臭い。」

と言いつつ壁ぎわに身をよせ、片手で窓をあけて通りを鋭い目つきで眺めわたした。

目でちよつと合図をしてから彼女はもつて来たトランクを寝台の下へ押しこみ、どうして例の酒場へも事務所へもやつて来ないか、日本へ帰りたくなつたのだらう、病氣は懷郷病ではないか、などと質問したが、いずれにも伊能は答えなかつた。然りと答えてみても否と答えてみてもどうなることがらでもないし、陳秋瑾の問いもさして答えを期待したものでないことは目色で明らかだつた。話途中で彼女はふたたび寝台の下からトランクを引き出し、わざと中身を見せるようなぐあいにはひらいて底のほうからウイスキーの小ビンを取りだし、テーブルの上に置いた。トランクの中身は、あきらかに宝石箱と思われる小箱やハンケチにつつんだ貴金屬らしいものであつた。

伊能はたてつづけにウイスキーを飲んだ。そ

してビンが半分ほどになつたころ、陳秋瑾はいくらか酒にうるんだような目つきで、

「伊能、あなたは中国共産党にだれか知つた人がいるでしよう？」

とたずねた。伊能はいよいよはじまつたぞ、と思つたが、たずねた陳女士そのものは冗談のうちに、にやにや笑つていた。

「さあ……」

と伊能は口ごもつた。この答えがおかしかつたか彼女はふつふつと老女のようなふくみ笑いをもらした。事実、戦中戦後にかけて、彼はさまざまな中国人その他と知り合いになつたが、一体だれがどの党を信じどんな思想をいだいているかなどということは容易にわかるものではなかつた。一口話してすぐにいだいてる政治思想がわかるというような人は、真底からのテロリストかよほど平和で安全の保障された国の住民であらう。

「まづないと言うより仕方がありませんね。」

陳女士はふくみ笑いをこらえかねてか、いくらか声に出してまで笑い、笑いおえるとさつと立ちあがり、

「ときどき事務所へも出ていらつしやい。」

と言つて再見とも言わずに出て行つた。トランクは寝台の下においたままであつた。やがて彼女は三日に一回か四日に一回、時には夜中にもやつて来てそのたびごとに一つか二つずつ鍵のかかつた小型のトランクや書類カバンをおいていつた。伊能は彼女のなすがままにほうつてお

いた。それらの荷物が安全無害のものとはどうい思えなかつたが、しかし拒絶してみたところどうなるか。

ある日の午後、彼女が珍らしく手ぶらで——横に長い大きなハンドバッグにウイスキーの小ビンを入れただけでやつて来たとき、伊能ははじめて彼女の仕事に立ちいつた質問をしてみた。

「ええ、だけれどもそろそろ大詰めよ。このつぎはあなたの……番よ。」

あなたの……何の番なのか聞きとれなかつたので聞き直すと、彼女は西洋人ふうに肩をすくめて笑つただけで何も言わなかつたが、その態度はよほどうちとけていた。伊能と陳女士がウイスキーをなめザクスカをつまみながら交す会話は、政治にかんすることは両方とも注意深くさけて大部分は文学や美術にかんするものであつた。そしてそれを話している限りは、その話題はいつか知らず知らずのうちに伊能と陳秋瑾という、恐ろしくかけはなれた存在をいくらかは一つの流れのうえにのせてくれるのであつた。とはいへ、たまたま話が中国の現代文学にうつつてゆき、林語堂について伊能が何か言つたとき彼女はふいに、

「That foreign Chinese!」

ふん、あの外国中国人め！と吐きすてるように言つたことが深く伊能の頭に残つた。母国では生きられない、生きるにたえない中国人、フォリン・チャイニーズというそのことばは、

額の細い、のつべりした林語堂の面影をありありと描きだしていた。左右両翼からいれられず、ニュー・ヨークの高級アパートに住んで、めつたに帰国せぬ世界的文人林語堂の運命——そういったことを伊能が考えていると、陳秋瑾は吐きだすような今の調子とはまるで違つた、低い声で、

「だけれど、母国でだつて、生きてゆくことは大変ですわ、今のようない時代には。」

彼女は伊能の目をまともに見つめた。外国に脱出するという伊能の意図が、どのくらい真剣なものなのか、念を押すというようない、何か迫るようない視線であつた。伊能は黙りつづけたあげく、

「しかし外国に出たからといつて気楽なはずがない。」

と言うと秋瑾はすぐにうけて、

「今のあなたのようにね。しかし母国にいても外国ににいるような気持で生きなければならぬ人もいます。」

広い額には油に光つた簾髪すだげかみがそれこそ簾のようない一本一本そろつていたが、切れ長い幾分つり上がつた目には、しかし嘆きなど影もなく日本の女性にはめつたに見られぬ鋭角的なものが光つていた。

Foreign Chinese と言われれば伊能の頭には Foreign Japanese という言葉がすぐに浮かび、それにつづいて何物か最も大切なもの——口に出して言えは祖国といつた堅いことばに

なるしかないような存在——にたいする *dislike* 裏切りといふことばが、霧のように頭の中にたゆたつて去ろうとしなかつた。伊能は目をあげて秋瑾の顔を見た。彼女が伊能と同じ物思いにふけつていたとは思われぬが、伊能の視線に出会うと薄青い静脈の筋の浮かんだ臉をしずかにおろし、またしばらく沈黙がつづいた後で、ぼつりぼつりと彼女がその母国にいらねえようになつたゆえんの、身上話のやうなものを語りだした。

「わたしは人を殺したことがある女です、直接手をくだして殺したことはまだないにしても、結果としてわたしは殺したことにまちがいありません。もちろんわたしは、こんな××文化運動委員会などにはじめからいたのではありません。わたしの本職は、軍統——ご存じでしょうが、正式の名前は軍務委員会調査統計局で、抗戦中にできた黒衣社系の対日本および対共産党の特務工作機関です——その軍統の特務工作員、略して特工といふあれです。」

……どこからお話したらいいか、全くこの政治というものは、頭も尻尾もなく、敵味方だといつてみたところで、結局は敵味方が相対的に歯車のようにがつちり食いあつたうえで、政治にとつてただ一つ絶対に必要なもの、血と肉をもつた人間をがりがり食つて生きているのですから、どこをどうといつて切りやうもありませんが——そうでした、わたしが特工になつたころ、日本はシンガポールを征服し比島を奪

略し、南京ナンキンには外見だけでもとにかく政府みたいなものができるし、国共の合作はつくに破れ、特工も買収されたり同志で殺しあつたりで悲観的な空氣がただよい、しだいに腐敗がひどくなつてゆきました。対日本、対共産党どころか、対内監視が特工の一番大きな仕事になりかけていました。安全な人など一人もなく、連合軍勝利の見通しがはつきりして来ても、こつした陰惨な空氣はいつこうに改まりませんでした。」

陳女士がそこまで話したとき、「伊能さん。」と窓下で呼ぶ声がした。彼女は、つと立つてふたたび窓ぎわの壁に身を寄せ、

「あなたのところへ遊びに来る人があるのねえ。」とおどろいたように言い、「ああ、あの買さんだわ、ちよつと行つていらつしやい。あなたが外へ出たらその後でわたしが出ます。そして今夜もう一度ここへ来ますから。」

伊能はしかしあまり行きたくなかつた。というのは買青年は伊能と机を並べて仕事をしていたのが、近ごろ辞職して故郷の満洲へ帰ると言いだしていたのだが、彼の辞職の原因は、ほかならぬ伊能自身にあつたのだ。事務所の会計係が職員給料をにぎつて銀行利子をかせぐために、明日払う、明日払うといつて遷延している、下級職員が生活に困り、それでも文句も言えないでじつとがまんしているのを見かねた伊能が、これ以上悪くなりつこない捕虜同然な身の気やすさを利用して、買青年と会計にむか

つて面罵したことがあつた。

『徴用しながら給料も払わぬとは何事だ、こんな政府があるものか、こんなものは政府でも何でもない、どろぼうみたいなものだ。』

という意味のことをもつとひどいことばで言い、下級職員たちの窮状をもついでに言つてやつたのである。会計はぬらりくらりと逃げたが、賈青年は負けた日本人伊能にこんなに言われたことを深く恥じて辞職してしまつたのであつた。

「満洲国」新京の師範学校から広島文理大へ留学した賈青年は日本人の気性をよく知つていた。「お別れに來たんですよ。いよいよ近く発ちます。」

中国人インテリとしては珍らしく真黒に日焼けのした背の低い青年は、酒屋の細い腰掛けに腰をおろすと、白い清潔な歯をむきだしてそう言つたが、それにたいしても伊能は明瞭な返事ができなかった。彼の故郷の満洲は内戦の真最中で、それでなくても日本側への協力者であつたらしい彼の家族などはどうなつてゐるかわかつたものではなかつた。

「そう、それは……」

とまで言うやうと賈青年はすぐにひきとつて、「東北（満洲）は大へんだ、とおつしやるのでしょうか？ それあ大へんですが、僕はいい紹介状をもらいましたから大丈夫ですよ。」

「それならいいが。」

近ごろの伊能は、寝ていてもいつか自然に心臓の鼓動が早くなるほどに、何らかの意味で政

治に身をまかせ、どちらかを選ばねばならぬ人間というものの在り方が彼に底深い恐怖と感動を与えるのであつた。

「その紹介状をだれにもらつたと思いますか？ 陳秋瑾女士からですよ。」

秋瑾は賈青年にとつても上司であつたが、いかに彼女でも今さら国民党系の人を紹介したとは思えなかつた。

「それで……」

「それで、ある人に何度も会つてその人からまた紹介状をもらつたのです。」とまで言うやうと賈青年は声を低めて、「東北人民政府の上のほうへね。」

「それはよかつた。」

とは言いはしたものの、伊能は腹の底からよかつたと思つたわけではなかつたので、ことばじりは知らずしらずにごつてしまつた。青年は敏感に伊能の心中を察して、「ですからこれ以上心配なさらないでください。ところで」と言つて彼はまた声を低めた。「來ていたのでしょよう？ 陳女士が？」

伊能がしずかに杯をあげると、

「あなた、ウィスキーの匂いがするからわかりましたよ。陳女士はウィスキーが好きですからね。いいんです、心配なさらないでください。あなたには言つてもいいと思いますが、僕はその、陳女士が紹介してくれた人、魏克典という中共の人ですが、この人から頼まれているのです。当分陳女士の身のまわりをもそれとなく氣

をつけていて上げろ、つて。陳女士が中共に内応しているという噂があるらしいんです。」

別れぎわに青年は伊能の手をしっかりと握つて言つた。

「僕はあなたに中国をのしられたおかげで別の中国へ行くふんざりがつきました。またお会いできるかどうかわかりませんが、あなたのことは忘れません。伊能さんも成功されるよう祈つています。」

別れて陳秋瑾の歸つた後の屋根裏へもどつても、伊能は自分が一体どうすれば「成功」したことになるのか、全く見当がつかなかつた。ともすれば目に見えぬ兩方の陣営から同時に追及され審判されて自殺するのが「成功」と思えるような暗い淵のまわりをさまよつてゐるおのれの姿が思ひえがかれた。賈青年は伊能にのしられてふんざりがついたという。これもまた考えてみれば恐ろしいことではないか。下級職員のためと思つて、気楽な身分を利用して抗議しただけの、この小さな行為が、それだけが原因ではないにしてもすでに一つの波紋を起してゐるのである。賈青年は選択したのだ。

長い夕照もようやく尽きて暮れかけた九時近く、陳女士の來るのがおそいので、夕食を取り出ると、途中タクシーに乗つた陳秋瑾が呼びとめた。迎えに來たのだ、と言う。座席に坐るとすぐに、

「賈さんは中共の魏克典という人の話をしたのでしょうか？ その克典さんにこれから会いに行く

のですよ。あなたを紹介するかたがた、ことがどの程度運んだかもしかめに……」すべては筒抜けなのだ。そして好むと好まぬとにかかわらず、人は危険な人びとと結ばずには何事もできない。彼女は伊能のほうは見ずに暗い通りをまっすぐに見つめてひとりごとのように話した。

「この魏克典という人には、ひどい目にあわされました。いまでもときどきいじめられています。」しかし彼女の声には、いっこうに憎しみの調子はなかつた。むしろいじめられることを楽しんでるといったようすさえあつた。「この克典さんは、わたしたちの学生時代の友人だったので。あのころわたしたちは抗日救国学生運動を組織し、克典さんはその秘書長でした。わたしたち、いえ、わたしたちわたしたちと申して来ましたが、そのころわたしには黄という愛人があつて、この人と同棲して二人とも工人会のオルグとして労働者獲得のために努力していました。わたしにもこんな時期があつたのです、もちろん共産党系の運動でした。それが後日、突然政府の弾圧をくつて、克典も愛人の黄もわたしもみな逮捕されてしまいました。一時はどうなることか、と心配しましたが、さいわい克典さんの親御が運動してくださり、三人とも一応転向ということにして出してもらいました。今になつて考えれば、克典さんも、もちろん黄もいわゆる偽装転向にすぎなかつたのです。出獄してすぐ克典さんは女学校でわたしと同窓

の小黨という金持のはねつかえり娘と結婚し、運動とは一切手を切つてしまつたように見えました。そして黄は出獄するとすぐ、一時行方不明になりましたが、ある晩ぶらりと歸つて来ました。そのときはもう、わたしは国民政府が合法的な政府である以上、そしてそれが抗日が一切に優先すると宣言している以上は、共産党と手を切つて戦うのが正しい。抗日の道に二つはないはずだ、と決心してしまつていました。わたしは単純な女なのです。ところが黄は頭ごなしにそんなわたしをどなりつけたものです。どなられてわたしもカツとなつて言いました。

——だつてあなたも転向を誓つたじやありませんか。」

——あんなやつらに何を誓つたところが誓つたことなんかになるものか！」

と、こういう戦法で反撃して来ました。

それでわたしと黄の仲もおしまいです。わかれてしまいました。いよいよわかれるとき、妙に不自然に胸を張つて黄はこんなことを言いました。

——抗日なんぞはわかりきつたことだ。しかし現代のような時代では、右翼であるか左翼であるか、とにかく立場の鮮明でない人間、中間的な第三者などは人間ではない。もちろん中間的な人間のほうが大多数だが、これをひきいて立場を鮮明にさせるのが、彼らを人間にするみちなのだ。君のように脱落してゆくやつなどは、最も唾棄すべき、敵だ……」

そこまで一気に言うのと、いくぶん声をおとし、

——しかしまあ、僕らにも共通の理想にもえた日々のあつたことだけは、おたがいに忘れないうちにしよう。」

それから長いあいだ、長い長いあいだ克典夫妻の消息も、もちろん黄の行方もわかりませんでした。何でも黄は延安に、克典夫妻は重慶に、いるということは風の便りに聞きましたが……」

運転手は車の輻輳する通りへ乗り入れ、警笛だけではたらぬと見えてウエーウエーという動物的な掛声をかけていたが、ときどき、絶えまなく英語でしゃべりつづけている奇怪な中国人、この男と女は何者なのだろう、とでもいうふうになりかえつて見た。陳女士はユダヤ人の宝石店の前まで来ると車を止め、すたすたと店に入つて二、三分して出てきた。車へもどつて来たときの彼女は、さつきの回想にふけるといつた表情を拭うように去つて、車台に足をかけるときも鋭く左右を見まわした。車が動きだしてからまたしばらく沈黙がつづいた。

「黄……そう、愛人の黄とわかれてからのわたしは、身の平均をうしなつて暗い地獄へ一直線です。わかれた直後、乙という、今思つただけでもぞつとするような男が現われて、中華全国で一番働きのいいのある仕事についたらどうだと言つてくれたのです。それがこの特工の仕事でした。この世界は入つたらもう出られません。

出口なしです。もがけばもがくほど深くはまりこんでゆくだけで、仕事も仕事なら、しまいに重慶でこのZという男と結婚するほどにさえなつてしまいました。もちろんすぐに別れましたが、その当時からわたしの直屬上官が今の文化運動委員会主任委員の何大金なのです。特工というものは、死ぬまで転勤ということがありません、たとえ部署が変わっても。つかまつたらもう一生です。——Zとの生活から逃れるために上海での任務をもらつて奥地を離れました。上海へ来て、中共、国民政府、南京偽政府、日本軍との四つが、だれにしても決してたどり切れないほどにもつれあつた網の結び目にいる要人を一人一人狙いうちする工作に、もう全身うちこみました。ときどき黄や克典のことが思ひだされると、わたしは彼らを裏切つているのではないかという、胸を突きさされるような苦痛を覚えました。この苦痛からまぬがれるためにも、緊張して工作にはげんだものでした。中共のアクティヴな人は別として、国民政府側にしても南京偽政府にしても、また軍人以外の日本人にしても、これらの重要な結び目にいた有能な人は、ほとんど全部といつていいくらい、左翼からの転向者でした。そしてそれになう特工もまた勤勉で忠実な人は、これまたいいは転向者でした。転向者というものはどうやら必然的に元来のものの敵になる運命にあるようです。そうした要人の何人かを、ワナにかけて狙いうちしました。何のために、などとあな

たは問ひもなさいますが、やがて手ひどい、痛烈な復讐がやつて来ました。それでなかつたら、伊能、あなたと一しよに車に乗るなんということもありえなかつたでしようから。

ちようど、あなたとあの酒場でばつたりぶつかつたように、抗戦末期のある日、G書店にゆくとそこで例の克典に会つてしまつたのです。このG書店というのは、日本軍占領下の上海でたつた一軒、店の奥に非占領地区で出版された本や雑誌を秘密裡に置いてある店でした。がんらい、本や雑誌は十把一からげに左翼的なものと見なすという方針でしたから、このG書店も日本憲兵と競争でわたしたちの監視下にあつたのです。ところがばつたり顔をあわせても、克典は知らぬ顔をしているのです。もちろんわたしも知らぬ顔。そのうち克典のほうが店を出ました。やはり以前のように少しびつこをひいています。わたしは斜行型をとつて尾行しはじめました。克典は十分くらいは尾行されていることを全く気づかぬようでした。物珍らしそうに右を見、左を見て歩いてゆくのです。それでわたしは克典がつい近ごろ奥地から上海へ下つて来たのだな、と感じはしたものの、人違いじやないか、などという疑念もわきました。ところが、ある曲り角まで来るとふいに見えなくなり、わたしがあわてて人込みの中へとびこんで、まごまごしていると、うしろからぼんと肩を叩かれました。やはり克典です。にやにや笑つてさえました。これは相当な訓練をつんでいる

な、と直感しましたが、わたしもそんなことはけぶりにも見せず、大仰な表情をつくつて、

——まあお珍らしい！ 奇遇ね！ まあ……何年ぶりでしようかしら。」

とか何とかあいさつをし、そこは女の特権を活用して克典には一言もはさせないで、奥さんの小黛はどうしていらつしやる？ 一段とおきれいにかなりでしよう？ いつこちらへおいでになりました？ 旅行はさぞ大変でしたでしよう？ お仕事はいかがですの、何をなさつていらつしやいます？ とまずこんなようなことをたてつづけにべらべらしやべりまくりました。

なぜ旧友を尾行したりするのかとおつしやるのですか？ わたしたちは、それはもうだれかれかまわずに尾行しますよ、同志の後でもつけますわ。どうせこつちも尾行されているかもしれませんし、それに克典も一応転向者だつたはずですから、やはり監視しなければなりません。わたしがしやべりつづけても彼はいつこうに毒気を抜かれたようすはなく、にこにこしてこれから映画の試写会へゆくんだが、一しよに来ませんか、と言うのです。何年ぶりかで会つたのに映画の試写会へ誘うなんて変です。これでわたしは彼がきつと共産党か南京偽政府か日本かこのうちどれかのために働いているな、と感じとりました。要するに一人では太刀うちできないので、試写会という人だかりの中へつれこもうというのでしよう。もちろんわたしの正体を

むこうが知つているということはこのさい予想しなければなりません。克典は、妻の小黛も来るはずだから、と言うのです。わたしも彼と二人きりでは、双方とも針をのんだままでいるならいいのですが、一方がちくりと刺して来たばあい、別れて久しいのですから刺しかえさずにごまかして通るだけの共通の話題にたぼしいでしょう？　ですからおつちよこちよいの女学生だつた小黛がいれば、まぜつかえしながら思わぬ収穫があるかもしれぬと思つて試写会へ行くことにしました。会場までの車中、わたしはおのおのうしろ暗い過去のことよりも映画や文学の話題をえらんで、

——どんな本をお読みですか、こんな占領下の上海なんかにも何か読むにあたいますものがありますかしら、G書店で何か見つかりました？」

と、あわよくば思想的な動向をさぐろうとて水をむけましたが、

——「さあ……」

と言つたきりで、よほどたつてから、

——僕はこのごろ古いものを読んでいますよ、イデオロギーにも飽きましたし、何しろ経史書集といつたつて僕なんか学生時代以来古典輕蔑論にわざわいされて見たこともなかつたのですから。」

としんみりした口調で言いました。まんざらわたしの質問をそらすためだけではなさそうで、わたしも、つい釣ひこまれ、ああそうだ、自国

の古典ぐらい知つていなければ、と思つたほどでした。そう思つてみると、彼のいかにものびのび育つた良家の子弟らしい顔つきにも、どことなく憔悴したような暗い影がありました。

こんな会話をしながらも、わたしは一生懸命に考えていたのです。映画の試写といえ、當時上海には中日合辦の中華電影公司しかなかったのですから、映画はいずれ漢奸どもの作つたものにきまつています。克典の妻の小黛なら日本人におべつかを使うぐらゐるかも知れませんが、あの克典がそんなことを——それに克典とて、たとえおぼろげにはあつても、わたしの正体を知つているらしいのになぜぬけぬけ誘つたりするのか？——しかし、あたしも映画の試写会などといういやらしいところへ得々と出てくる売国奴どもの顔を見ておき、敵の文化界に一通りの顔をつくつておくことも悪くない、とまあ、こう方向をきめて、べつに対策や戦術、とくに退路のことも考えないでいました。

会場へつくと、克典とわたしが一しよに来たのを見て、さすがに小黛はもの言えぬくらいおどろいたようでしたが、たちまち彼女一流のおしやべりをはじめました。

——まあ秋瑾……まあおさかななことね、御身分といひ何といひ、腕のきく方は違つたものだわ。わたしは太平洋戦争のはじまるちよつと前に香港からシンガポールへ逃げたのよ。シンガポールから重慶へもどるまでの苦勞といつたら、それはもう……重慶へ帰つてもこじき同

然、おちぶれるとだれも相手にしてくれないのよ。それでまたこじきみたいにな上海へ流れて来たのよ、よろしく願ひしますわ。でもほんとにまあ、あなたは美しいし、働きもあるし、うらやましいかぎりだわ……」

あいかわらず、とわたしは思いました。小黛はバカです。(なかなかバカでないことは後にわかりましたが)、とにかくこれでもう克典、小黛の二人で香港、重慶、シンガポール、上海とこの四つの地点を結ぶ何かの仕事についているということが手にとるやうにわかつてしまつたわけです。そしてこんな試写会などへ、上海の上流階級との連絡があるいは、カモさがしに來ているとすれば、何の仕事か大体的見当はつきます。日本と南京偽政府関係の和平運動か、でなければ中共の華僑工作かです。

話しながら克典の顔をちらりと見ました。彼はにがりきつたような表情でバカな妻の背中をつついていましたが、やがてあきらめたやうにどこかへ行つてしましました。

映画は、ドストエフスキーの『罪と罰』を中国流に翻案した『恋之火』というくだらないものでした。しかし見ているうちに……突然はツと息をのみました。

主人公のラスコリニコフにあたる男に扮した俳優が、じつに……黄、あの黄に似ていたのです。暗闇の中でわたしはラスコリニコフの、いえ、黄の運命が思いやられて息をするのさえつらくなつて來ました。『私情でつらくなつたら

その相手を戦術的に疑え、疑い抜いて切り抜けよ。常に悲哀をはらえ。哀感ほ裏切り行為のさきぶれた。』というのが特工の戒律、あるいは生活的な戦術の一つです。わたしは数年来地下にもぐつたきりで全く消息のなかつた黄と、近ごろの中共関係の事件を結びついたり切りはなしたり、映画はただ目だけにまかせ、頭の中では一生懸命代数でもやるつもりでこのつらさを乗りこえるにたる答えをさがしていました。映画はしだいに進んでラスコニコフの親友のラズミールヒンが気がいが同然のラスコニコフにいろいろ親切にしてやるところへさしかかりました。わたしは——またはツとして気づきました。ラスコニコフが黄なら、ラズミールヒンは、克典ではないか。克典がこんなに深く日本、偽政府、それに、もしかして、こちらがわの特工にまで食いこんで何かを企図しているとしたら、むかし一しよに運動をやっていた黄がかならずどこかそこらにいるに違いない！

冷たいものが背筋を走りました。わたしは特工の仕事に深入りしたはじめてのころから、いつも漠然とした恐怖をもちつづけていましたが、そのときはじめてこの恐怖の正体を見せつけられたのです。いつかは『共通の理想にもえた』あの黄と殺しあわねばならぬのではないかと、という、これがその恐怖の正体なのでした。

画面では金貸しの老婆を殺したラスコニコフはしだいに外からも内からも追いつめられてゆきます。しまいにはある高い、あるいは虚妄

な理想に憑かれたラスコニコフを追いつめているのは、検事でも判事でもなくてほかならぬこのわたしではないか、とそんなふうに思えてきて座席にじつと坐つていられなくなりました。そつと立つて近くの席にいたはずの小黨に先に出る——と言いかけてわたしはまたぞつとしました。席にいたのは、小黨ではなくて薄暗い試写室ではつきり見えなかつたといえ、まちがいなくあの愛玲なのです。主任の何大金の秘書兼護身役をしている、女特工の愛玲です。何となくワナにかかつたように思われました。愛玲は画面から目をはなしてじろりと冷たくわたしを眺め、物も言わずにまた画面のほうへ目を転じました。

しばらく廊下の椅子に腰をおろしてぼんやりしていました。白々とした外光の中へ出ると、暗闇で見たラスコニコフ、いえ、黄の面影がなまなましく目に浮かび、乳のあいだにぐつしより汗をかきました。『罪と罰』だ、と心からそう思わないわけにゆきませんでした。そろそろ罪が罰にかわる時期にさしかかっていたのです。

しかしなぜ、と気持の立ち直るのを待つて、自分で反駁してみました。特工としての心構えにかえつて。なぜそんなに黄のことが気がかりなのか、と。けれども考えれば考えるほど、特工も共産党も理想も、そんなことはどうでもいい、ひたすらただの人間、理想や政治のためにこわばつていない普通の人間、監視したりされ

たり追放したりされたりもすることのない……そういう人間をひたすら求めている、ただそれだけの自分に気づいて——そうみじめな気分につき落されました。恐怖という神様にも似たものにあやつられて今この世に、そんなふうな普通人などがいるはずがありませんの。

あのころの黄は、イデオロギーにこりかたまつた、人間だかイデオロギーの化け物だかわからぬような人でしたが、しかしよくよく考えてみれば、わたしが愛し信じていたのは、そんな彼ではなくて、たとえば夕御飯を食べるときなどに胡椒にむせて低い鼻に皺をよせ、ごほんごほんと咳をする、そしてわたしが背中をさすつてやる、そんなときの子供らしさのまだ残つていた黄なのでした。やはり彼の思い出には、政治や思想——中原の逐鹿はいざ知らず、中国の天の涯にある、天山にかかつた白い雲のように消えがてに消えかねるものがただよっていたのです、たとえ自分がどんなに汚いはずかしい仕事に手足もろとも首までとつぶりつかつていようとも。天山の上のことは、いくら特工でも手も足もおよびません。

椅子から立つて人気がない廊下でエレヴェーターを待つていますと、うしろから克典がやつて来ました。

——もう映画はすみましたの？」

——いいえ、まだですが、ちよつとお話したいと思つたのですから。」
克典の目は全然笑つていません。むしろ緊張

しきつて、どうしたらやわらげ得るか、と努力しているようでした。それを見てわたしは直感しました。もう事ははじまつている、何か克典と黄閼係のことが……と。エレヴェーターが上がつてきて戸がしまる寸前、廊下の曲り角にちらりと花模様の旗袍が見えました、愛玲です。ハンドバッグの止め金をパチンといわせて姿を消しました。特工仲間の愛玲がもういち早く何かぎつて楔をうちこんで来たのです。

すぐに車をひろつて克典とわたしは法国公園へゆきました。エレヴェーターから車の中。そして公園の茂みの前のベンチに恋人然と坐るまで、二人とも無言でした。沈黙は特工にとつては一番の禁物なのです、……沈黙は刺殺か射殺のときになつてはじめて必要なのですが、そのときはどうにも重苦しくてわたしも口がきけなかつたのです。黙つてわたしは祈つていました。克典の話というのがどうか黄のことではありませんように、どうか元気で活躍していてくれるように、しかしあまり元氣すぎるといつかは、わたしは特工の手にかかることがあるかもしれない、中共解放区から外へ出ないように、とそんな矛盾したことを、しかし心の底から祈つていました。克典は目を伏せて胸や頭の中の悩みをどうかしようとしてもいうふうに、蹴をひく右足の膝をさすつていました。

——中国は……暗いですね、いつになつたら……

というのが克典の最初のことばでした。大げさなことを言いだしたものだ、とふと気づいて、あんまりしんみりしてしまつてはいけない、わたしは特工なのだ、と改めて思いなおしました。旧友の克典と出合い、『罪と罰』の映画を見てからというもの、妙に切迫した哀感がたちこめてきて急速に特工意識が薄れてゆくようなのです。

——しかしむかしは、おたがい中国は、中国は、とか、占領されてしまふということは人間まで腐らせる、とかと御題目のように言つて暮したこともありましたね。」

そう言つてますますいけない、と思ひました

が、克典はその話に乗つてきて、
——それで今はどうなのです、もう中国は、中国は、とは考えませんか、重要なポストにいられると聞いています。」

わたしは正直に言いました。

——ええ、思ひようがなくなつたように思います。重慶、延安、南京、長春、それに東京と、政府が四つも五つもあつてどれもこれもがみな敵視しあつていながら、そのじつ、地下ではどれもみな氣脈を通じあつていようでは、思ひようがありません。この抗戦に勝つたところでしょうせん戦後にはどういふことになるか、わたしは希望的な観測などできませんもの。」
——そこまですると突然克典がわたしの肩を抱いてひきつけました。何をするのか、と思つて突きのけようとしめすと、ベンチのうしろをすつ

すつと草を分けて通る足音がしました。愛玲の派遣したスパイがつけて来たか、それとも……いや、やはり中国は暗い——やがて足音が遠ざかる。と克典は手をはなし、目尻をぴりぴりと癢ませてわたしをまつすぐに見つめ、

——一つだけ、一カ所だけ明るくする方法があります。秋瑾、私に力をかしてくれませんか。」

克典の話によると、何でも彼には流亡中に知りあつた一人の親友があり、二人は何もかも打ちあけて語りあう仲になつた、というのです。その親友は仕事にはきわめて熱心だつたが、ときどきは仕事も何も食事まで忘れてしまふほどにぼんやりと、放心したようになつてしまふ。しかもそんなときに何か言いかけると火がついたように怒る。それがあつた夜のこと、日本軍の重圍におちてもうだめだろうと二人とも覺悟をきめ、山腹の穴にこもりながらたがい過去の話をはじめたというのです。その親友が言うには、かつて自分には一人の愛人があつた。しかしその女性も、二人の生活になれてくるにつれて、運動や同志そのものまで嫌うようになった。それで自分は力のかぎり救おうとしたがついにだめで、わかれるとはとんと同時に彼女は転向してまるで正反對な、恐るべき環境へ引きこまれていつてしまつた。自分はあることがどうして起りえたか、どうにも理解しがたい。自分のほうにも欠点はあつたろうが、あんなふうに自分で自分を腐らせるような道へなぜつづけばし